



薬の伝言板 ～糖尿病と注射薬～



No.298 2022年9月

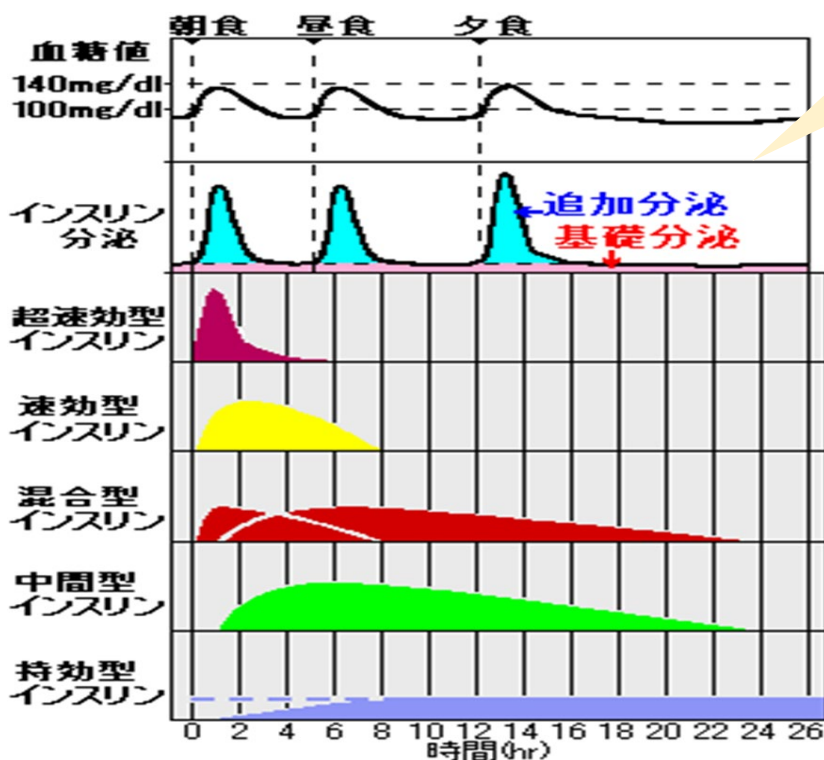
丸子中央病院 薬局

糖尿病は、日本では5～6人に1人が罹患している身近な病気です。

その治療として、飲み薬や注射薬が使われることがあり、今日では糖尿病の注射薬は様々な種類のものが登場し、患者さんの病態やライフスタイルに合わせた薬剤が選択できるようになりましたので紹介します。

インスリン製剤

糖尿病は、インスリンが分泌されない、または体の中でうまく作用できないために、血液中を流れる糖（血糖）が増えてしまう病気です。インスリン注射は、体の外からインスリンを補う注射薬です。**効果が早く現れる超速効型や速効型、ゆっくり現れ長く続く持効型溶解**、速効型と持効型溶解の間にあたる**中間型**などがあり、状態によって使い分けます。



体内のインスリンには、一日中一定の割合で少しずつ分泌される「**基礎分泌**」と、食後の血糖値の上昇に応じ一時的に分泌される「**追加分泌**」があります。

～代表薬剤～

ノボラピッド注

ノボリンR注

ヒューマリンR注

ノボラピッド30 ミックス注

ヒューマログ50 ミックス注

ノボリンN注

ヒューマリンN注

トレシーバ注、レベミル注、

ランタス注



◆強化インスリン療法って？

インスリンを頻回に注射することにより、健康な人のインスリン分泌に近づける方法です。

疲れた膵臓を休ませることで、インスリンの分泌機能の回復が期待できます。

通常はインスリン基礎分泌を1日1回(中間型または持効型溶解インスリン製剤)、

インスリン追加分泌を1日3回(超速効型または速効型インスリン製剤)、計1日4回注射し、

患者の病態に合わせ調整されます。



インスリン以外の注射薬「GLP-1 受容体作動薬」

GLP-1 とはインクレチンというヒトの体にあるホルモンの一種で、インスリン分泌を促し血糖値を下げる働きがあります。この薬剤は GLP-1 の効果が長時間続くよう作られた薬です。血糖値が上昇した際にインスリン分泌を増やすため、単独で使用する場合は低血糖を起こしにくいことが特徴です。

毎日注射	週に 1 回注射
ビクトーザ	トルリシティ
バイエッタ	オゼンピック
リクスミア	ビデュリオン

GLP-1 受容体作動薬は、インスリン分泌作用はありますが、インスリンの代わりにはならないため、インスリン依存状態か非依存状態かの評価をした上で、使用可否が判断されます。



GLP-1 受容体作動薬は注射剤のみでしたが、2021 年にリベルサスという飲み薬も登場しました。

インスリン+GLP-1 受容体作動薬配合剤

2 種類の成分の作用により、インスリンの補充かつ血糖に応じたインスリン分泌の促進の効果があります。1 回の注射手技で 2 種類の成分を同時に投与できるため、治療の負担を減らすことができます。

インスリン・GLP-1 受容体作動薬配合剤			
ゾルトファイ配合注	インスリンデグルデク (トレスーバの成分)	+	リラグルチド (ビクトーザの成分)
ソリクア配合注	インスリングルルギン (ランタスの成分)	+	リキシセナチド (リクスミアの成分)

◆ 糖尿病の注射薬は最終手段？



糖尿病の注射 = 糖尿病末期の治療ではありません。適切な時期に注射剤を使用することにより、病態の改善が期待できることがあります。また、糖尿病の注射薬は、依存性のある薬剤ではありません。

注射薬の種類によって使用方法が異なります。安全に有効に治療を行うためには、正しく使用することが大切です。不明な点があれば、医師や薬剤師、看護師等、医療スタッフへご相談ください。
使用方法、保管方法、正しく行うことが大切です。



文責 薬局 峯村 和田